

水俣学通信

第 33 号
2013.8.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



「海上ピケ隊が行く」(写真 新日窒労組旧蔵資料)

目 次

原田正純先生追悼：
「原田先生追悼の3冊」…………… 2

客員研究員紹介：
「『水俣』の記録と記憶としてのテレビ・
アーカイブ」…………… 3
小林直毅

報告：
「『さいれん』復刻版刊行記念シンポジ
ウムに参加して」…………… 4
磯谷明德

「原田正純追悼展—水俣学への軌跡」を
終えて…………… 5
井上ゆかり

開催準備が進む「第2回環境被害に関
する国際フォーラム」…………… 6
中地重晴

水俣学研究センターの新刊紹介………… 7

こぼれ話：
奈良の大仏と水銀汚染…………… 7
今後の予定、水俣学研究センター日録………… 8

《原田正純先生追悼》

原田先生追悼の3冊

原田正純先生が昨年6月11日に亡くなってから、はや1年以上がたつ。その間に3冊の書籍が出されているので紹介したい。

『原田正純追悼集 この道を——水俣から』

(熊本日日新聞社、2013年1月)

水俣学研究センターは熊本日日新聞社との共同編集で本書を今年1月に上梓した。私たちは、単なる追悼や思い出の本ではなく、原田先生の人としての生き方や考え方、その足跡を描き出そうとした。多くのゆかりあるかたがたにも、同じ趣旨で追悼の文章もいただいた。原田先生の言葉や事績を引用しながら詳細年譜も作成した。著作・論文目録も収録しようと考えたが、それだけで1冊の本になりそうだったのでこれは断念した。

じつは、原田先生が書かれた学術論文以外の多くの書物は、自身を語る事と水俣病とを語る事が重なっている。それが多くの人を惹き付けたのかもしれない。そこで『原田追悼集』は、原田先生が書き残され、なかなかひとの眼につきにくい文章を収録した。学術論文として投稿される前に研究室の雑誌(気質季報)に自由に書いたもの、先生の歩みの原点ともいえる少年時の戦争体験、石牟礼さんの『苦海浄土』の原作も掲載された『熊本風土記』にペンネームで執筆された演劇評論、カップ共和国の話、カナダ先住民のオジブエ語をなぞった文字なども含め、多くの文章をおさめ、これらで1つの作品となっている。私たちは現在、原田正純全集を刊行しようと準備を進めているがこれはその助走のような本でもある。

朝日新聞西部本社編

『対話集 原田正純の遺言』

(2013年5月、岩波書店)

宇井純さんも土本典昭さんも、他界される直前に熊本・水俣を訪れられていた。原田先生は、遠くから古くからの友人が会いにくるといって、なんだか、またお別れを言いにくいのかなあ、などとつぶやいておられた。その本人自身が、古くからの友人・同志を訪ねて回り対談をして本にまとめようといいだした。書名は『遺言』と考えられていた。(朝日新聞連載中は「言伝て」であり、書物にまとめるときに先生の希望が活かされた。)



対談は、2012年1月から始まったが、病気が進んでおり自宅や病院で15人との対話がなされた。

水俣に通い始めた初期の頃、庭先で遊ぶ兄弟の兄が水俣病、弟が水俣病ではないことを不思議に思ってそれを口にした原田先生をしかった金子スミ子さん、胎児性水俣病の研究に悩んでいた頃、「子どもを見てみなっせ、みんな同じでしょうが」と原田先生の目を開かせくれた坂本フジエさんから水俣病患者や、川本愛一郎さんや杉本肇さんのように患者の第二世代、三井CO中毒事件の松尾 虹さん、チッソ労働者であり水俣病を告発していた山下善寛さん、水俣病研究会以来の同行の士の宮澤信雄さんや富樫貞夫さん、カネミ、土呂久と素中毒を闘った人々、世界の公害発生地域をともに回った宮本憲一さん、そして石牟礼道子さんら文学者との対談が収められている。新聞連載時は対談の抄録だった。本にまとめるにあたって、編集担当の記者が記録にあたって対話を完成させたもの。対談相手の候補はまだあったが、原田先生の力が尽きた。

佐高 信

『原田正純の道 水俣病と闘い続けた医師の生涯』

(2013年5月、毎日新聞社)

本書は原田正純先生の生き方と語りを著者の目を通して描いた1冊である。

「水俣病は病という名の殺人だ」と題された第1章から始まり、子ども時代から水俣病患者との出会い、医師として水俣病に関わる中での葛藤、そして水俣学の提唱にいたるまでの原田先生の生涯を描き出している。

原田先生と触れあった人はだれも覚えていることだろうが、人柄はその語りにならわれていて、同じ話を何度きいてもそのつど引き込まれてしまう。深刻な話でさえも面白く聞こえてしまう。本書を読んでいくと、その語りがあちらこちらに再現されている。通説と思っていたことが患者と接する中で覆されていったこと、中立とは患者の立場に立つこと、少数派が時代を切り開くということ、差別のあるところに公害が起きると喝破したことなど、佐高氏の筆を通して、あらためて聞くことができる。原田先生は「水俣病は終わっていない、公害の原点に立ち戻るべきだ」と語り続けられた。本書もまた、原田先生のその思いを託した水俣学の創設の章で結ばれている。(花田昌宣)

《客員研究員紹介》

「水俣」の記録と記憶としてのテレビ・アーカイブ

法政大学社会学部
(水俣学研究センター客員研究員) 小林直毅

最近では、研究テーマのひとつとして「メディア／アーカイブ研究」と書くようになりました。そうなのは、もうひとつのテーマとして「水俣病事件報道研究」を進めてきたからです。

水俣病事件報道研究を共同で進め、2007年にその成果を『「水俣」の言説と表象』（小林直毅編著、藤原書店）として公にしました。この研究では、多くの新聞記事を読み、テレビ番組を見なければならないのですが、それが大きな困難に直面したのです。全国紙では、1950年代の水俣病事件報道のほとんどが、地方版の記事にとどまっています。その大部分が、縮刷版やマイクロフィルム、データベースには残されていなかったのです。

このため、水俣病センター相思社に所蔵されているスクラップに多くを負うことになりました。過去のテレビ番組も簡単には見られず、運よく再放送を録画できたり、何らかのかたちで提供してもらえたりしたものを資料にしました。こうした経験から、メディア研究としての水俣病事件研究を進めるためには、「水俣」をめぐるメディア・アーカイブが不可欠だと考えるようになりました。

しかし、アーカイブは研究資料として必要なだけではありません。新聞記事やテレビ番組は、それぞれの時代にマスメディアによって語られ、描かれた「水俣」の記録であり、人びとが新聞やテレビで経験してきた「水俣」の記録です。そこからは、「水俣」がメディア体験としてどのように記憶されてきたのかも見えてきます。アーカイブが構築され、公開されるようになると、こうした記録と記憶の具体的な内容を多くの人びとがたどり、それを再構成するようになるはずですが。

そのような考えから、ここ数年は、主に「水俣」のテレビ／アーカイブ研究を進めています。これは、テレビ番組のアーカイブを構築しながら、「テレビは『水俣』をどう描き、人びとはどのように経験し、記憶してきたのか」を解明しようとするものです。

さまざまな「水俣」のテレビ番組が制作され、少なからぬ人びとがそれを見ることで「水俣」を経験し、記憶してきました。原田正純先生もその一人です。初めての「水俣」のドキュメンタリー番組は、1959年11月にNHKが制作した『奇病のかげに』です。これが放送されたとき、原田先生は東京でインターンをしな

がら、小さな診療所の当直医をしていました。そこで、先生はこの番組を見たのです。岩波新書の『水俣病』の冒頭には、番組のなかの「水俣病患者のフィルムを見て、たいへんなショックを受けた」と書かれています。別の本では、「失明して、よだれを流した少年がラジオにしがみついて栃光の勝負を聞いている姿が印象的であった」（『この道は』熊本日日新聞社、1995年、68頁）とも書かれています。

多くの人びとが似たような経験をして、「水俣」の記憶を形成しています。それを解明していくことが、「水俣」を知っているという人たちが、どのような「水俣」を記憶していて、今、どのような「水俣」を知る必要があるのかを考えていく手がかりになるのです。

NHKアーカイブス（埼玉県川口市）や放送ライブラリー（横浜市）には、数多くの「水俣」の番組が保存されています。NHKアーカイブスには、番組の素材映像も保存されています。1959年当時、チッソ水俣工場にあった動物実験室の様子も記録されています。「一任派」とよばれた患者さんたちが、1970年5月に厚生省でどのような状態に追い込まれて斡旋案に調印させられたのかも映像となって残されています。熊本放送の報道ライブラリーには、この患者さんたちに「補償金」が支払われたとき、地元の信用金庫職員が笑顔で待ち受け、タクシーで連れ去って口座を開設させていたことが映像で記録されています。

こうした「水俣」の記録と記憶を解明していく実践的研究として、「水俣」のメディア／アーカイブ研究をつづけています。成果の一部が、早稲田大学ジャーナリズム教育研究所、放送番組センター共編『放送番組で読み解く社会的記憶』（日外アソシエーツ、2012年）の一章になっていますので読んでみてください。



《報告》

『さいれん』復刻版刊行記念シンポジウムに参加して

九州大学大学院経済学研究院
(水俣学研究センター客員研究員)

磯谷明徳



2013年6月28日、熊本駅前のくまもと森都心プラザホールで開催された標記のシンポジウムに参加・出席をした。『さいれん』復刻版の第1回配本がなされた時に、それを記念しての集いと祝賀会が2010年1月29日に水俣で開催されたときにも、それに参加した。今回のシンポジウムは、『さいれん』復刻版の配本が終えたことを記念してのものであるが、今回特に印象に残ったのが、記念講演、4人の方々による報告の前になされたDVD上映の中の一コマである。緒方紀明さんによる組合事務所の内部を案内する映像である。組合が作成した写真集によって、組合事務所の全景は見えていたが、その内部を見るのは初めてである。壁一面に組合員の名札が下げられていた光景はさぞや圧巻であっただろうと想像され、それに対して映像では、壁の片隅に6名の名札だけがかけられているのは、何とも悲しく、その場面が強い印象として残った。

さて、わたしは水俣学研究センターの客員研究員として名を連ねさせていただいているが、2006年10月から始まった「チッソ労働運動史研究会」への参加を花田さんから誘ってもらったのが新日窒労組の方々との関わりの始まりである。それ以前に、深草雪英さんによる2004年度修士論文を読ませてもらっていたので、新日窒労組のことは知っていた。90年代半ばから2000年代初めまでの間、日仏の国際共同研究において戦後日本の雇用・労働を担当テーマとしていたわたしにとって、戦後日本の労働社会のマクロ的な変遷についてはある程度の知識はあった。しかし、戦後の労使関係、労働運動の側面については深入りするのを避けていた。それゆえ、花田さんからお誘いがあった時には、一も二もなく研究会への参加をお願いした。フォーカスグループインタビュー方式という研究会への参加は初めての経験であったし、それが水俣学現地研究センターで行われるということから、何よりも現場での感覚、現場から得られる直感というものを得たいと思ったのことだった。聞き取り調査を専門としてきた人たちからは、現場に立つと、目の前にある膨大な素材や資料に目がくらみ、事の本質を見失いがちになるということは聞いていた。しかし、実態を把握し、それを理論的に整理するという段になれば、現場で得た感覚や直感が必ずや効いてくる。そうでなければ、どんなに資料や文献を渉猟したとしても、その議論は何か宙に浮いたものようになってしまうということも聞いて

ていた。

わたしのチッソ労働運動史研究会でのノートの日付は、2006年12月15日から始まっている。今年は2月21日に行い、第23回目を数えている。研究会が始まって、丸6年を経過している。やはり、実際は上の聞き取り調査を専門としてきた人たちから聞いた以上のものであった。次から次に出てくる大量の資料の山を目の前にして右往左往し、丸6年経っても、研究者としては情けないことに、依然として自らの立ち位置を定められずにいる。

にもかかわらず、研究会の案内が来る度に、喜々として水俣に出かけるのはなぜかを自らに問うてみる。端的に、元組合員の方々から話しをうかがうことが「楽しい」からである。組合のリーダー層の中には、安賃争議とその後の会社側からの露骨な嫌がらせに対する抵抗の中で、傑出した組合活動家になっていった人たちもいただろう。しかし、『さいれん』復刻版の各配本の解説の中でたびたび指摘されるように、多くの組合員は地域の中に根を下ろした当たり前の労働者であり、第二組合に行かなかったという「情宜」によってつながる人たちである。それは人として恥ずかしくない生き方をしたい、地域の中で後ろ指を指されるような生き方をしたくないという思いであり、人として当たり前の事柄である。わたしは、そうした正直さや律儀さ、愚直さに惹かれている。そうした人たちにとっては、大仰に振りかざされる階級闘争や社会主義といった言葉は無縁であっただろうし、働くことは苦痛を伴う生活の糧を得るためだけの手段ということでもなかっただろう。カネでは動かないというのは、会社の過酷な仕打ちに対する抵抗の意志でもあっただろうが、それは仕事と自らの技能に対する誇りを表すものでもあったはずだ。そして、元組合員の人たちは皆、明るい。2010年の『さいれん』復刻版刊行記念の祝賀会の時もそうであったが、今回のシンポジウム終了後の懇親会においても、元組合員の人たちの間に「うらかな」共同体意識というものを感じられ、手作りの温もりのようなものを覚える。

6月28日開催のシンポジウムの印象記をという依頼であったが、私的なエッセー風になってしまったことをご寛恕願いたい。ただし、わたしにとって、今回のシンポジウムが水俣そして新日窒労組との関わりを改めて考えるきっかけになったことは確かなように思う。

《報告》

「原田正純追悼展—水俣学への軌跡」を終えて

水俣学研究センター研究助手 井上 ゆかり

2013年1月12日から6月11日まで「原田正純追悼展—水俣学への軌跡」と題し、原田先生の追悼展を水俣市の水俣学現地研究センターで開催しました。先生が他界され半年が過ぎようとしていた頃からセンターで追悼展はしないのかという問い合わせが多く寄せられていたこともあり、開催したものです。

現地研究センターの1階会場には、原田先生が現地研究センターで診察の際に使っていらした診察道具や白衣、先生からセンターに寄贈されていた16ミリフィルムやネガ類、研究ノートやカルテなどを展示し、診察風景や講義の様態などを映像で見たいできるようにしました。

原田先生からの寄贈資料は、当時センター長であった原田先生と事務局長であった花田昌宣との間で協議され、寄贈されていたものです。その中には、水俣病原因究明時期の資料や不知火海総合学術調査の資料など多岐に渡るものが含まれていますが、これらの資料は、2010年3月の先生の学園大学退職にあたってセンターに運び込まれたまま手つかずのままとなっていました。そこで、追悼展にあわせて整理作業を開始しました。資料整理は先生の研究を熊大時代から支え続けてこられた石坂美代子さんをお願いしました。石坂さんは、先生の研究を支えてこられた技官としての経験、資料に精通しておられると判断したためですが、それ以上に先生の調査資料の重要さをわかり、愛着を持っておられるからです。現在、原田先生の資料は目録化を進めています。

資料は何を語るか

資料が散逸しないよう蒐集し整理するのは、センターのプロジェクトのひとつに位置付けられています。その理由は2点あります。ひとつは、記憶の問題です。

人の「記憶」は、終わったことへの残像を常に作り替え再構成されるといわれます。しかし、紙に書かれた「記録」は100年後も残り、後世に読み解かれていくものです。今、水俣には、水俣病の歴史が書かれた看板は百間排水口にしかありません。どこも埋め立てられ整備され、そこに立っただけでは水俣病の歴史を知ることにはできません。広島や長崎とは大きく異なり水俣病の失敗の記憶は埋没しつつあります。そういう中で、原田先生が記された資料は、水俣病原因究明から現在に至るまでの足跡を残し次の世代に真実を伝えていくものだと思います。

2つめは、資料は結果だけでなく、そこに生きた人々の思い、事実の経緯を語るものだからです。原田先生の資料を通して、当時の患者さんたちに出会い、どのように権力と闘ったのかを知ることができます。

当センターには、原田先生の資料のほか、新日窒労組旧蔵資料、患者さんの資料、漁協資料、宮澤信雄さんの資料などが寄贈されており、順次公開の準備をしています。水俣学の理念である、専門の壁を越えた資料群であり、これらの資料が連体し後世に語る意義は大きいと思います。

現地研究センターでの開催にこだわる

来館者は281人にのぼり、大きな反響がありました。新潟、茨城など遠方からもお越しいただきました。

アンケートには、会場が狭く資料が少ないとの意見も寄せられました。

しかし、私たちは現地センターでの開催にこだわりました。それは、1999年に原田先生が学園大学に赴任され、水俣学を立ち上げ、2005年に水俣市に水俣学現地研究センターを設置し、最後まで現場にこだわっていらした場所で先生の足跡を辿っていただきたいからです。

客員研究員の牧口敏孝さんには、センターで撮りためた映像資料を編集していただき、先生がなぜ現場にこだわっていらしたのかを伝えていただきました。なかには半日以上かけて涙ながらに観ていらした方もありました。

副題を「水俣学への軌跡」としたのは、先生が大切にされていた「現場に足場をおく」ことを当センターが引き継いでいくという意思表示でした。

時をかけて

先生は調査の時、いつも「この調査が患者のためにどう生きるか」を問いつづけ、同行する私たちに笑顔のなかにも厳しい眼差しを向けてくださっていました。その先生を追悼していくには時間がかかります。少しずつ先生が歩まれた患者さんたちとの道を私たちもゆこう。それがセンターに残された者から先生への追悼だと信じています。



展示のようす

《報告》

開催準備が進む「第2回環境被害に関する国際フォーラム」

熊本学園大学社会福祉学部 中地重晴
(水俣学研究センター研究員)

はじめに

9月5日～8日の4日間の予定で「第2回環境被害に関する国際フォーラム」の開催を計画し、本研究センターの運営委員を中心に、開催準備を進めている。今回は、海外からカナダ、タイ、韓国、中国、台湾の5つの国・地域から20名、国内から3地域(新潟、水俣、福島)10名の方を招待し、報告していただく予定である。より多くの方の参加を期待する。

開催の目的

昨年亡くなられた原田正純先生が、熊本学園大学に移られたのをきっかけに、2000年から水俣学研究プロジェクトを開始し、水俣病事件を様々な分野から多角的に捉え、水俣病の教訓を世界に発信し、未来にその教訓を残すような研究を行ってきた。2005年4月には水俣学研究センターを開設、国の補助金も受け、大学内と水俣現地に研究センターをおき、調査・研究・教

育活動を行ってきた。同時に、カナダ、タイ、韓国、台湾などをはじめとする公害被害発生地域の調査研究ならびに、被害者や支援者との交流も実施してきた。

私たちは、2006年夏に「水俣の教訓は活かされたか」という問いかけを国内外に発する国際フォーラムを開催した。その後、水俣病問題は解決するにはほど遠く、また日本では東日本大震災と福島原発事故を経験した。国外でも公害、環境被害が発生し続け、地域住民・被害者の運動が各地で続けられている。

2006年の国際フォーラムに引き続き、長期継続的な国際交流と水俣学の国際的な発信を目的に、第2回環境被害に関する国際フォーラムを企画した。これは、水俣学の理念と方法に則り、国境を超え、学問の分野を超え、専門家と市民の共同取り組みによって、水俣病の教訓、負の遺産(失敗)を繰り返すことのない世界を構築することをめざしている。

国際フォーラムの開催概要

9月5日(木) 9時30分～18時30分
熊本学園大学 高橋記念ホール
基調講演 「水俣病失敗の教訓を活かす」
丸山 定巳 氏(水俣学研究センター顧問)

特別講演1 「フタバから遠く離れて」
井戸川 克隆 氏(前福島県双葉町長)

セッション1
「被害の全容と地域社会への影響、現地からの実態報告」 参加国の代表からの報告

19時～21時 懇親会 7号館 学生食堂

9月6日(金) 9時～18時30分
熊本学園大学 高橋記念ホール
特別講演2 「日本の環境問題の現状と課題」
淡路 剛久 氏(日本環境会議)

セッション2
「被害発生と拡大防止、被害補償と住民の闘い」

セッション3
「現状から将来への展望」
各国からの報告と討論

9月7日(土) 移動日

9月8日(日) 9時30分～17時
水俣市もやい館ホール
患者・住民からの訴え：世界と連帯し発信する
坂本 しのぶ氏(胎児性水俣病患者)
上村 好男氏(水俣病患者互助会会長)
近 四喜男氏(環境と人間のふれあい館語り部)

提言 「水銀条約について」
中地 重晴(水俣学研究センター)

パネルディスカッション
「水俣病・失敗の教訓をアジアに活かす」
各国からの報告

18時～20時 懇親会 あらせ会館

主催：第2回環境被害に関する国際フォーラム実行委員会・熊本学園大学水俣学研究センター
共催：総合地球環境学研究所
後援：熊本市、水俣市
協力：日本環境会議
参加費：無料(懇親会は有料、事前予約)

各国からの報告者、プログラムの詳細、参加申し込みなどは水俣学研究センターのホームページをご覧ください。

水俣学研究センターの新刊紹介

水俣学ブックレットシリーズ9

「水俣からのレイトレッシン」

熊本学園大学水俣学研究センター 編
143頁
発行：熊本日日新聞社



水俣学研究センターでは、このほど水俣学ブックレットを新たに2冊刊行いたしました。

水俣学ブックレット9『水俣からのレイトレッシン』は、現時点での水俣学研究の到達点を広く伝えるために刊行されました。発生から半世紀以上、その歴史で何を間違ってきたかを明らかにすることが水俣病の教訓にほかならないという視点から「水俣病は終わっていない」ことを訴え、現場に寄り添う研究者たちからの現状報告です。水俣学研究センターでの日頃の研究成果を活かして研究論文を読みやすく咀嚼した文章で構成されています。くわえて、水銀条約にかかる章およびカナダ先住民の水俣病についての報告章も設けました。原田正純先生の論稿も掲載しておりますが、ご自身が執筆された最後の研究論文となりました。

水俣学ブックレット10『水俣病と向きあった労働者の軌跡』は、チッソの労使関係小史として編集いたしました。水俣学研究センターでは、新日窒労組機関紙

水俣学ブックレットシリーズ10

「水俣病と向きあった労働者の軌跡」

花田昌宣・井上ゆかり・山本尚友 著
166頁
発行：熊本日日新聞社



「さいれん」復刻版の刊行を2年前から継続しておりましたが、6月の最終配本を終え、完結しました。各回配本にそれぞれ解説と書誌解題を付しておりましたが、解説をまとめて大幅にリライトして、1冊にまとめ、年表を加えたものです。新日窒労組にかんしては、1968年の「水俣病と関わらなかったことを人間として恥じる」という恥宣言で有名ですが、近年になってあらためて注目され、研究も出ています。ただ、これまで通史がなく、全体像が見えにくかったところ。この組合の60年の歴史をたどりながら、水俣病を引き起こした企業の労働者たちの闘いと生活の姿を伝える手がかりになればと思っております。

いずれも、熊本県内では書店に並んでおりますが、県外ではなかなか見ることがありません。発売元の熊日情報文化センターあるいは水俣学研究センターにお問い合わせください。

(熊日情報文化センター ☎096-361-3274)

《こぼれ話》

奈良の大仏と水銀汚染

さる5月23日、幕張で開催されていた地球惑星科学連合の学術大会で「8世紀の奈良平城京における重金属汚染」という学術報告があり、東京では朝日新聞が「平城京、水銀汚染じゃなかった 東京大などが土壌調査」という見出しで報道した。奈良の大仏については、金メッキに水銀が用いられていたことは、万葉集にも歌われ、ほぼ、同時代の古文書(「大仏殿碑文」「延暦僧録」)にも記されており、以前から注目されてきた。これらの記録をもとに工学系の研究もなされ、大仏と同様の製法での実験も過去行われ、用いられた金量や水銀量も推計されていた。この度の研究報告は、東京大学大気海洋研究所の川幡穂高教授によるもので、学会抄録によれば、平城京のあった奈良市内等の4カ所の土壌分析の結果、「水銀汚染は検出されず、平城京の市民には害はなかった」とのことであり、「平城京はいわゆるエコシティで」あった、とされている。

ただし、奈良の大仏に用いられたのは、無機水銀であって、水俣病の場合の有機水銀とは異なり、大仏造営に携わった人々は無機水銀中毒。大仏に使う純金を

水銀に1対5の割合で溶かして、大仏に塗布して、それを熱して水銀を気化させたという。その水銀蒸気を吸った工人たちが中毒にかかったものと推測され、平城京全体が汚染さ



デジタル復元された黄金の奈良の大仏
出典：大石岳史ほか「創建期奈良大仏および大仏殿のデジタル復元」日本バーチャルリアリティ学会論文誌 10巻3号、2005年9月

れていたという訳ではない。今回の研究報告については論文を待たないと正確なことは言えないが抄録を見る限り、土壌中の水銀の分析による環境汚染が取り上げられており、これまでの史料解析や実験と矛盾する訳ではないようだ。

奈良の大仏は、天平勝宝4年(752年)に開眼供養が行われており、今から1200年以上も前のことである。その頃の水銀汚染まで推計できるとは近代科学の力恐るべし、といえよう。それに比べれば、たかだか50年余りの時間しか経っていない水俣病を引き起こした水銀汚染の実態が未解明というのは何とも理解しがたい。(H)

今後の予定

「第2回環境被害に関する国際フォーラム — 水俣病・失敗の教訓を将来に活かす」

9月5～6日 熊本学園大学 橋記念ホール

9月8日 水俣市もやい館ホール

第12期水俣学講義

9月26日(木)～ 毎週木曜日 13:00～14:30

熊本学園大学 11号館 1173教室

第10期公開講座

「海外事情あれこれ — 聞きたくてもなかなか聞けない話」

10月15日～11月12日の毎週火曜日 18:30～20:30

水俣市民館2F第1研修室

水俣学研究センター日録

4月

- 1日 胎児性世代の被害に関するWG：花田・井上・田尻・牧口・平郡・阿南（水俣）
- 4日 国際フォーラム実行委員会
- 8日 「茶のみ場」作業部会：宮北・藤本（水俣）
- 9日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 10日 国際フォーラム実行委員会
- 13～14日 豊島学(楽)会：中地（豊島）
- 15日 ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
- 15～17日 F・溝口訴訟最高裁判決：花田・井上・田尻・牧口・山下（東京）
- 20日 生と死を考える会 講演「公式確認から57年目を迎える水俣病事件と水俣・芦北地域の再構築」：宮北（熊本）
- 23日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 29日 胎児性世代の被害に関するWG：花田・井上・田尻・山下・近沢・永野・谷・伊東（水俣）
- 30日 溝口訴訟最高裁判決報告集会：花田・宮北・井上・田尻・牧口（水俣）

5月

- 1日 慰霊祭：宮北・井上・田尻（乙女塚）
- 11日 映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学

ぶ」：田尻（西南学院大学）

- 14日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 18日 廃棄物学会九州支部総会：藤本
- 20日 ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
- 20～21日 震災アスベスト調査：中地（郡山・南相馬）
- 22日 水俣学研究センター平成25年度総会
- 24日 さいれんシンポ熊日取材：井上（大学）
- 25日 胎児性世代の被害に関するWG：花田（水俣）
- 26～28日 豊島調査：藤本（豊島）
- 27日 廃棄物問題研究委員会：中地（京都）
水俣市環境モデル都市推進委員会：宮北（水俣）
- 28日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 29日 『原田正純の遺言』刊行記念講演会：井上（福岡）

6月

- 1日 阪南中央病院労働組合視察受け入れ：井上（水俣）
- 3日 神戸大学講義：「水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした市民参画・協働の『場』づくりと『水俣学』」：宮北（神戸）
- 4日 みなまた地域研究会：花田・中地（水俣）
- 9日 第30回天草環境会議打合せ：花田・田尻（大学）
- 11日 原田追悼展最終日（水俣）
健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 15～16日 福環入門水俣現地研修：花田・宮北・中地・藤本・井上・田尻（水俣）
- 17日 ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
- 19日 小児性患者ケア会議：田尻（水俣）
- 21～24日 科研「公害教育運動の再審」研究会：宮北・田中（福島）
- 24日 「茶のみ場」作業部会：藤本（水俣）
- 25日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 26日 タイプロジェクト会議（大学）
ブックレット⑩『水俣病と向きあった労働者の軌跡』発刊
- 28日 『さいれん』復刻版刊行記念シンポジウム「水俣に生きた労働者の軌跡」(くまもと森都心プラザ)

編集後記

時がたち癒されるものがある。水俣病は加害者側が過去のことのように扱うがゆえに当事者たちは癒されることはない。(M・T)

水俣学通信

第33号 2013.8.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／花田 昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913(ダイヤルイン) Fax：096-364-5320
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/ E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印刷／ホープ印刷株式会社